2019年JAF中国ダートトライアル選手権第8戦　2019年JMRC中国ダートトライアルチャンピオンシリーズ第8戦
2019年JMRC全国オールスター選抜第8戦　INDYダートトライアル2019［JAF公認No.2019-4030］

開催日：9月22日　開催場所：テクニックステージタカタ　格式：準国内　主催：TEAM INDY［ JAFクラブ登録No.加盟34021］

レポート／勝森勇夫　フォト／谷内寿隆

チームメイト同士の最終決戦となったN1クラスは長谷川和也選手が僅差の戦いを制してタイトルを手にした。

長谷川和也インテグラ、大接戦の末にタイトル確定！

全8戦が組まれた2019年度JAF中国ダートトライアル選手権も、いよいよファイナル。シリーズチャンピオンの座をめぐる争いが最後の最後までもつれたクラスも、この日で決着する。シリーズの行方が最終戦まで持ち越されたのはN1、SA1、RWD、そしてSCD1の4クラス。

なお、最終戦の舞台となったテクニックステージタカタは、全日本戦のファイナルステージにも使用されることになっており、開催日が2週間後に迫る。当日は、その下見を兼ねてエントリーした全日本選手も多く、そしてこのことがシリーズの行方を少なからず左右することとなった。

決戦当日、テクニックステージタカタは未明から雨が降った。心配された台風17号の影響は少なく、雨はスタート時には一旦上がるも、路面は、浮き砂利がたっぷりと水を含んだ、足を取られやすいザクザクの状態。砂利が払われるまでは、いつにも増してスタート順が後になるほど有利なコンディションだ。

ここまでは、長谷川和也選手が3勝、川本圭祐選手は2勝。N1+クラスは、ポイント争いで先行する長谷川選手が10位以内に入れば、自身、初となるシリーズチャンプが決まる。

1本目は、ラリーでは今シーズンの中四国地区戦を制し、「ダートラでもいい締め括りをしたい」と話す川本選手がリード、2本目もさらに1秒タイムを削る安定した速さを見せた。一方、長谷川選手は「1本目は抑え気味に走った。2本目は攻めていきます」と力強いコメントを残してスターティンググリッドに立った。

言葉通りの強気の走りを見せた長谷川選手のタイムは何と、川本選手を0.03秒という僅差で下すベストタイム。見事な逆転で最終戦を制して、シリーズ制覇に華を添えた。来季は全日本に挑戦するという長谷川選手は「クラスがSAとなり、クルマも一からリッセッティングになりますが、頑張りたいです」と、決意を新たにしていた。

SA1クラスは、シリーズ前半を連勝でリードした藤本慎太郎選手を、後半に入って調子を取り戻した松岡修二選手が捉えて、逆転。藤本選手は最終戦で優勝するしかシリーズチャンプの勝目がなくなっている。そんな二人の戦いに、下見参加の全日本勢(浦上真選手と葛西キャサリン伸彦選手)が割って入った。

これには藤本選手も「もう開き直って走るしかないです」と苦笑。結局、このクラスは全日本の二人が1-2フィニッシュ。3位には優勝した浦上選手にコンマ4秒まで詰め寄った松岡選手が入賞、シリーズチャンプも獲得したが、「勝てる手応えはあった。できれば一番を取って、シリーズを決めたかったです」と悔しさをにじませた。

中国ダートラシーンの名物となった“初代カリーナ”を駆る横山修二選手がシリーズをリードするRWDクラスは、2位につける山崎貴之選手が不出走となったことで、横山選手のチャンプがほぼ確定。順位は、地元で全日本ドラの矢野淳一郎選手や、中部から遠征の横内由充選手に競り負けはするものの、愛車の老体に鞭打

1. PN1クラスは全日本ドライバー上野倫広選手がヒート1のタイムで逃げ切った。
2. 全日本ドラ対決となったSA1クラスは浦上真選手が0.1秒の僅差で優勝。

3. SCD1で2位の畑窪琢巳選手。**4.** N1で2位の川本圭祐選手。**5.** PN1で2位の藤原祐一郎選手。**6.** SCD2で2位は四国から遠征の梶田昌弘選手。**7.** 0.07秒という僅差で惜しくも2位のNS1西田ツカサ選手。**8.** SA1で2位の葛西キャサリン伸彦選手。**9.** SCD2クラスは藤田宏明選手が1本目のタイムでオーバーオールウィンを飾った。**10.** 1本めの5位から見事な逆転勝ちを見せたSCD1一柳豊選手。**11.** N1で4位の谷口成治郎選手。**12.** PN1で4位の大野吉弘選手。**13.** N1表彰の皆さん。**14.** PN1クラス表彰の皆さん。**15.** RWD表彰の皆さん。**16.** SCD2表彰の皆さん。**17.** NS1表彰の皆さん。**18.** SA1表彰の皆さん。**19.** SCD1表彰の皆さん。**20.** PN1で3位の内海晋作選手。**21.** カリーナを駆る横山修二選手はSA1で堂々の3位入賞。**22.** N1で3位の永田誠選手。**23.** SA1で3位の松岡修司選手。**24.** SA1で2位の横内由充選手。**25.** NS1で3位の片岡学選手。**26.** SCD2で3位の織田一昭選手。**27.** SCD1で3位の山下貴史選手。**28.** SA1で4位の藤本慎太郎選手。**29.** NS1で4位の松浦海渡選手。**30.** SCD2で4位の上田強選手。**31.** SCD1で4位の鈴鹿浩昭選手。**32.** RWDクラスは地元の矢野淳一郎選手が中部から遠征の横内由充選手を抑えて優勝。**33.** NS1クラスは全日本ドラのマイケル・ティー選手が地元勢を抑えて優勝。

ち、1秒半まで詰め寄る速さを披露した。ノスタルジックなダートラ車で、現行モデルに挑み続ける横山選手。「来年も旧車。自分はこのスタイル変えません」と断言した。

一方、混戦を極めるSCD1クラスは山下貴史選手と一柳豊選手のシリーズ頂上決戦に、スポット参戦となる学生ドライバーの畑窪琢巳選手が絡むスリリングな展開。最終戦を前に、足回りをリセッティングしてきた一柳選手と山下選手だが、ともにリアの動きが路面に合わず、1本目は畑窪選手が二人を大きく引き離す。

インターバルに、一柳選手は車高を前下がりに、一方山下選手はリアを下げ気味に調整し、ラストランに賭ける。2本目、まずは畑窪選手が、1本目のタイムをさらに2秒以上縮める渾身の走りで首位をキープ。その後、9番手走者の山下選手が1本目を4秒半縮めるも追いつけず、この時点で2番手。ここで、勝つしか後のなくなった最終走者の一柳選手が、タイヤの性能をフルに使い切り、1本目を6秒も短縮する神がかった走りで大逆転劇を演じた。

地区戦も山下選手に1ポイント差をつけて、チャンピオン獲得。コンマ差で2位に甘んじる我慢の戦いが続いた一柳選手の今シーズンだったが、「やっと金を獲れました。しかもシリーズチャンプ付きで」と満面の笑み。最高の勝利の栄光が最後の最後に待っていた。